

新潟市立小針小学校



# とぼりの子



平成30年7月18日発行

No.4

児童数 712名

## お母さんの声変わり

校長 長谷川 豊

「家庭という学校」の著者・外山滋比古さんは、こう言います。

「お母さんの声変わり」は、お母さんが、よその子を気にし出すときから始まる。よその子に負けてもらっては困る。遅れては嫌だ、すばらしくいい子であってほしい、そういう焦りが、声を荒くするのである。子どもも辛い思いをしなくてはならなくなる。母親は子どもを叱るとき、子どものためだと思っているけれども、その実は親のために、自分の気持ちのために、子どもを叱っていることが多い。母親は、自分の子どもだけを見つめているときは、やさしい、愛の言葉を使っているのだが、他の子との競争に負けさせたくないと思うようになると、とたんにけわしい声になってしまう。

それでも私は、声変わりするお母さんを素敵だと思います。親はいつも自信がないものです。発育が遅れているのではないか、よその子よりも劣っているのではないか、私の育て方がいけなかったのではないかと不安でいっぱいなのです。迷いながら、悩みながら、反省しながら子育てをしているのです。

叱らなくてはいけないうち、優しい声で叱ってられるはずがありません。ただ、他の子を引き合いに出して叱ってはいけないうちだと思います。子どもを感情で叱る大人の声はとげとげしく、子どもの悪い競争心をあおり、攻撃心をかき立てます。

私たち職員も声変わりしていたかもしれません。お母さんの声成わりは許されますが、私たちの声成わりはあってはならないものです。できなくて、分からなくて、困っているのは子ども自身なのです。それなのに、自分の力不足を顧みず、「何でできないの」「どうして分からないの」と、声を荒げて子どもに迫っている私たちがいたのではないかと反省しています。小針小学校の職員は、声成わりせず、落ち着いたやさしい口調で、子どもの心に響く指導ができるように研修していきます。

「女性の品格」や「親の品格」の著者・板東真理子さんは、「子どもの機嫌を取らない」「親子で自然を楽しむ」「手伝いをさせよう」「いじめをしない子に育てる」「悪口は言わない」「約束は必ず守る」「お金の経験を積ませる」「挫折を忍耐強く見守る」など、親子関係の在り方を提言しています。さらに、親の一生懸命さは子どもに必ず伝わりとして、「今何より大事なのは、子どもを俯仰天地に愧じず（心や行動にやましさがなく）、品格をもって生きる人間に育てること」と訴えています。

長い夏休みが始まります。よそ様はどうあれ、我が家のやり方、我が家のルールや約束で、親子で幸せ感を味わえる夏休みをお過ごしください。